



Title	幼児による人物記述 : 記述項目数と顔の記述内容
Author(s)	仲, 真紀子
Description	第6章
Relation	財団法人セコム科学技術振興財団研究助成平成18年度研究成果報告書 : 幼児の安全教育に関する総合的研究 : 幼児の危険認識の発達に及ぼす社会・文化的要因の影響, pp.81-88
Issue Date	2008
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/44801">https://hdl.handle.net/2115/44801</a>
Type	report
File Information	SKH18_81-88.pdf



## 第6章

### 幼児による人物記述：記述項目数と顔の記述内容<sup>1</sup>

北海道大学大学院文学研究科 仲真紀子

子どもを犯罪や事故から守るには様々な取り組みが可能であろうが、その一つは、大人が日頃から子どもの言葉に耳を傾け、子どもが誰と会ったか、何をしたか等、その生活を把握しておくことであろう。そのなかでも、誰と出会ったかはキーとなり得る重要な情報である（仲，2005）。

近年に起きたある誘拐事件では、子どもが犯人とされる人物に乗り込む所をみた低学年の児童が、犯人とされる人物について供述した。児童は犯人とされる人物をやせ形であると述べたが、逮捕された被疑者は体格がよかった（読売新聞 2004年12月31日）。別の誘拐事件では、事件の1週間ほど前、被害者となった少女が駅で人を待っているのが見かけられた。このとき、この少女は、「きれいな目をしたお兄ちゃんを待っている」と話していたという（読売新聞 2005年12月8日）。やせ形とされる記述は誤っており、「きれいな目」の意味は大人にはよく伝わらなかった。子どもはどの程度、人物を言葉で記述できるのだろうか。

古くは、法心理学者の草分けである植松（1958）がこの問題に取り組んでいる。彼は51人の幼児に絵を提示し、記憶するよう求めた。その後、助手が絵の内容に加え、絵を提示した植松自身についても尋ねている。調査方法は、身長、体格、髪型、顔の形、目、鼻、口、眼鏡、金歯、胸の造花等についてWH質問かクローズ質問（はい/いいえ質問、A or B質問）で尋ねるといったものであった。

正答率をグラフにしたものを図1に示す。WH質問（●で示す）への回答は身長を除き、0に近い。ズボンの色、服の色、胸の造花の正答率はそれぞれ2%、4%、6%である。クローズ質問（はい/いいえ質問を◇、A or B質問を□で示す）による正答率は高いが、ハンカチ（71%）、時計（82%）を除けばチャンスレベルであるだろう。

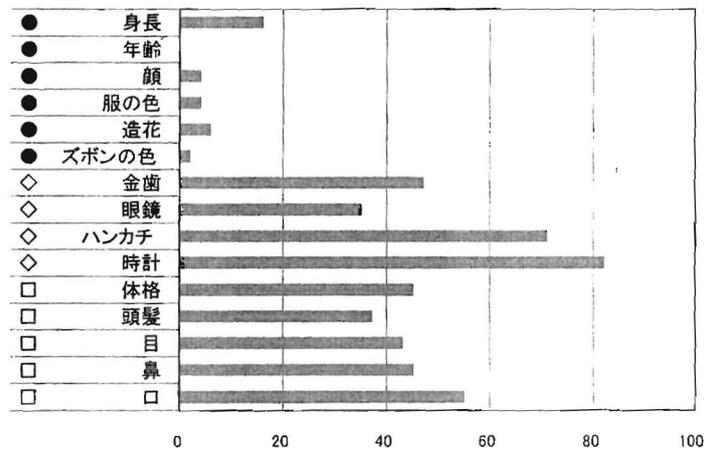


図1:植松(1958)の結果

<sup>1</sup> 本研究は安全教育プロジェクト、および科学研究費補助金基盤研究B（課題番号17330133）子どもの面接法-出来事を話すための語彙の補助を受けた。安全教育プロジェクトによる補助は、データの分析のために用いた。記して感謝する。

回答の内容をしてみると、正答以外の反応も等しく生じていることがわかる。顔、髪、目、鼻、口の結果を表1に示す。植松は自身の顔を「細い」としているが幼児の反応は「丸い」が7割である。植松の髪は「長」だったが、幼児の過半数は「短い」と回答した。植松の鼻は「低」く、口は「小」さかったが、幼児の最多反応は鼻は「高い」、口は「大きい」である。目のみが、植松も幼児の最多反応も「大きい」で一致している（しかし、目を「小さい」とする幼児も3割いる）。

表1：植松（1958）における幼児の人物記述

顔（細）		髪（長）		眼（大）		鼻（低）	
丸	72	長、分	40	大きい	44	高	50
四角	16	短、丸	59	普通	20	普通	26
細	8			小さい	34	低い	23

注：（ ）内は植松自身の記述であり、いわば「正解」である。数字は51人中の回答者数の%である。

幼児はでたために回答したのだろうか。あるいは、ステレオタイプにより、例えば顔は「丸い」、髪は「短い」と答えたのだろうか。植松の研究では「○○は何色でしたか？」「○○は大きいですか、小さいですか、それとも中ぐらいですか？」等の質問が行われた。こういった質問の形式が、幼児に回答しなければならないという圧力を与え、本来ならば「分からない」「覚えていない」と回答すべきことがらをも、いわばでたために回答させてしまったのかもしれない。また、大きいか、中ぐらいか、小さいかという選択肢が一般的でステレオタイプな反応を選択させてしまった可能性もあるだろう。

こういった言語記述を求める際の問題に考慮し、本研究では幼児と1年生を対象に、顔のかたちはどんなだった？髪はどんなだった？と項目を示し、あとは子どもに回答をまかせるオープン質問で人物記述を求める。また、こうやって得られた言語記述が顔の識別成績と関連するかどうかについても検討する。

## 方法

参加者：幼稚園児41人（女児19人、男児22人）、小学校1年生21人（女児13人、男児8人）の計62人。

手続：本調査は、幼児、児童における出来事の報告を調べる調査の一貫として、個別実験で実施された。実施場所は大学内の面接実験室、または幼稚園内の会議室または小部屋であった。調査は2週に分かれている。1週目は調査者Aが参加者にDVDで人形劇を提示し、出来事や登場人物の気持について話してもらった。調査時間はおよそ30分であった。2週目は、調査者Bが参加者に調査者Aについて尋ねる。まず言語記述を求め、その後で6枚の写真スプレッドを提示し、調査者Aの写真識別を求めた。写真スプレッドには調査者Aと同年代の女性の肩から上のカラー写真が6枚配置されていた。うち1枚が調査者Aであった。

なお、調査者 A にあたる人物は、20-40 代の女性 11 人であり<sup>2</sup>、それぞれが 1-27 人の参加者に対して 1 週目の調査を行った。調査者 B は、20-40 代の女性 9 人であり、それぞれ 2-20 人の参加者に対し 2 週目の調査を行った。1 週目と 2 週目は、異なる調査者が調査を行った。

実施に際しては、実験者 B は参加者に「この間、ここ（実験が行われた場所のこと）に来てくれたでしょう？」と話しかけ、「お姉さん（調査者 B）は、〇〇ちゃん（対象児）が、誰とどんなことか知らないの。」と告げ、先週のお姉さん（実験者 A）についての記述を求めた。記述を求める項目は、(1)どんなお姉さんだった？、(2)どんなお顔だった？、(3)お顔の形はどんなだった？、(4)髪はどんなだった？、(5)目はどんなだった？、(6)鼻はどんなだった？、(7)口はどんなだった？、(8)お洋服はどんなだった？、(9)あのお姉さん、何歳だと思う？、(10)身体の大きさは？（答えられなければ太ってた、痩せてた？普通？と尋ねる）、(11)背の高さ何センチメートルくらいかな？の 11 項目であった。

引き続き、写真スプレッドを示し、「やってくれたお姉さんがいるかな？いるかもしれないし、いないかもしれないけれど、もしもいたら写真を選んでみて」と教示した。その後、確信度を「どれくらい自信ある？」と尋ね、1（あてずっぽう）、2（少しそう思う）、3（まあそう思う）、4（かなりそう思う）、5（絶対そうだと思う）の 5 段階で評定してもらった。

## 結果

実験手続の不備、および参加者の都合により、2 人の参加者については写真識別が行えなかった。そのため、写真識別成績については 60 人のデータにもとづき、それ以外については 62 人のデータにもとづき分析を行う。第一に写真識別の成績について述べ、第二に人物記述の量的側面について述べる。第三に人物情報の中心的な内容である顔の形、髪、目、鼻、口について、どのような記述が行われたかを述べる。人物記述の量と内容については、写真識別との関連性についても検討する。

顔の識別：顔の識別の結果を表 2 に示す。全体の正答率は、正答率は 81% であり、幼児は 79%、1 年生は 85% であった。年齢×正誤、性別×正誤の  $\chi^2$  乗検定を行ったが、有意な偏りは見られなかった。また、確信度は、正答者 4.47、誤答者 4.33 であり、差はなかった。1 週間前であっても、個別で 30 分程度交流をもった人物については良好な記憶が形成されていると言えるだろう。

表 2：写真識別の成績

写真識別の結果	幼児	1 年生	計
正	31 (79)	18 (85)	49
誤	8 (21)	3 (15)	11
計	39	21	60

\* 実験の不備で写真識別ができなかった 2 人のデータは除いてある。数字は人（ ）内は % である。

<sup>2</sup> 50 代は 1 名のみであり、この人物については写真識別は行われなかった。残りは 20-40 代である。

ある。

記述項目数：11項目中「覚えてない」，「分からない」，「知らない」，無反応を除いた項目の数，すなわち何らかの回答がなされた項目の数について，年齢（幼児，1年生）×写真識別（正，誤）の2要因分散分析を行った。両者とも参加者間要因である。その結果，年齢による効果が有意であった（ $F(1, 56) = 5.70, p < .05$ ）。1年生の平均項目数（6.62）は，幼児の平均項目数（3.69）より多かった。その他の効果，交互作用は有意ではなかった。性別（女児，男児）×年齢（幼児，1年生）の2要因分散分析も行ったが，性差は見られず，年齢の効果のみが有意であった（ $F(1, 58) = 5.70, p < .05$ ）。

次に，年齢，体格，身長を除く8項目<sup>3</sup>に対する回答（「覚えてない」，「分からない」，「知らない」，無反応等を除く）について文字数をカウントし，この合計文字数に対して年齢（幼児，1年生）×写真識別（正，誤）の2要因分散分析を行った。その結果，正誤による効果が有意であった（ $F(1, 56) = 5.31, p < .05$ ）。正しく識別できた者の回答は平均37.26文字であったのに対し，識別できなかった者の回答は平均12.20文字であった。つまり，記述項目数には差はなくても，正しく写真を選べた参加者は，人物についてより詳しく（より多い文字数で）記述していたといえる。性別（女児，男児）×年齢（幼児，1年生）の2要因分散分析も行ったが，有意な効果は見られなかった。

図2に，項目ごとの回答者の%を示す。幼児では髪と体格以外は3割程度の反応率であるのに対し，1年生では髪と体格の他，顔のかたち，服，年齢，背などの反応も6割を越えている。ただし，顔，鼻，口は1年生でも反応は低い。

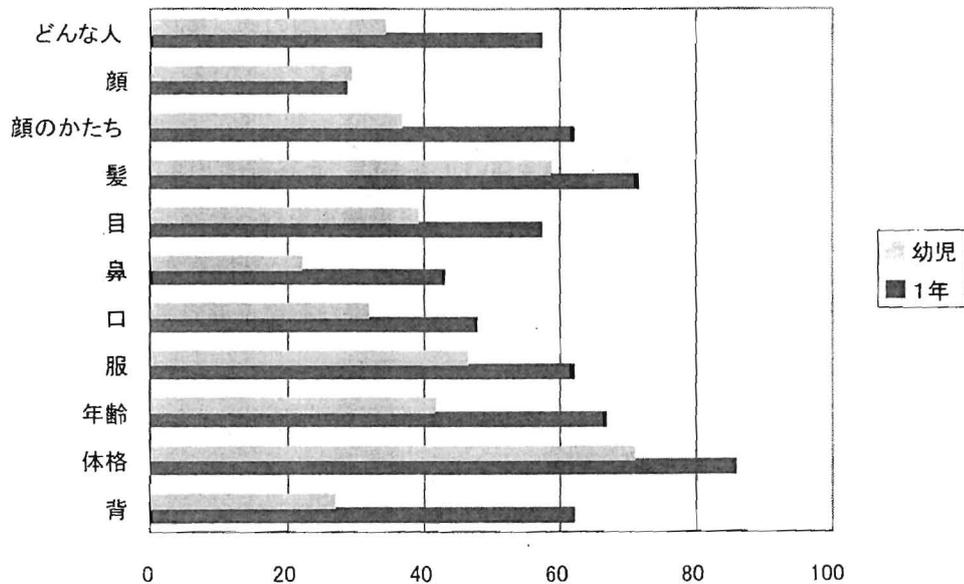


図2:各項目の記述者数(%)

<sup>3</sup> 年齢，体格，身長は〇歳，大小中，〇cmなどの回答となり，言葉による説明が少ないためカウントしなかった。

記述内容：人物を記述する際の中心項目である顔のかたち、髪、目、鼻、口について、「覚えてない」、「分からない」、「知らない」、無反応以外の回答について内容の分析を行った。内容は、各記述項目に対する回答を要素に分けてカウントした。例えば、「長くって茶色」は「長くって」と「茶色」に分けてカウントする。また、全体として、自分の目や口を指差しながら「こんな感じ」「こう」と述べる回答も多かったが、これらは「こう、こんな」としてカウントした。表3に、62人中の回答者数、誤答者数、記述数、誤答者の記述数を示す。質問に回答が対応していないなどの不適切な反応には\*を施した。

表3：顔の記述内容

顔のかたち	髪	目	鼻	口					
回答者数	28	38	28	18	20				
うち誤答者数	5	7	3	2	3				
記述数	30	46	28	18	20				
うち誤答者記述数	3	5	1	1	2				
こう、こんな	3	こう、こんな	2	こう、こんな	3	こう	4		
丸(い)、ちょっと丸	11	長い	14	普通	5	普通	3	普通	2
長丸、卵みたい、oval	3	短い	7	丸い	2	丸	2	大きい	3
四角	1	長さ(ここまで等)	10	小さい(かった)	2	三角	2	ちょっと小さい	1
おにぎりの形	1	黒	3	大きい	2	大きい	1	細い	2
丸いよりちょっと違う丸さ	1	茶色	1	細い	1	小さい	1	細くなかった(唇)	1
下の方が丸くて上は平ら	1	しばる、しばってた	3	細くない	1	高い	1	少し唇が細い	1
丸々	1	上べちゃんこで	1	パツチリ	2	低い	1	くちびるついてた	1
大きい	1	くねくねしてた。	1	キラキラしていた	1	短い	1	キラキラ光ってた	1
細い	2	ひもの感じ。	1	黒い	1	実験者と同じ	1	ちょっとおっかない	1
細長い	1	ふさふさ	1	女っぽい	1	赤い	1	にこつ、にっこり	2
短い	1	スマート	1	眼鏡	6	ついてなかった*	1	ほっぺ赤くなってた	1
黒い目*	1	小さい*	1	赤い眼鏡	1				
お鼻が赤い*	1								
首がなかった*	1								
眼鏡*	1								

注：oval（楕円）と述べているのは帰国子女である。

「顔のかたち」については「丸、卵みたい、四角」など、「髪」については「長さや髪型」、 「目」「鼻」「口」については大きさやかたちなどが述べられている。カテゴリーに即した、概ね適切な回答がなされているといえるだろう。表に示される通り、写真識別が誤答であった者の記述内容数は明らかに少ない。しかしこれらの者においても特に不適切な内容の記述がなされたわけではなかった。例えば「顔のかたち」における誤答者の記述は、「ちょっと丸、丸、細い」である。「髪」は「しばってた、長い(2)、長さ(2)」である。一方、写真識別が正確でも不正確な言語記述を行っている者もあった。例えば、顔における「首がなかった」、鼻における「ついてなかった」は正答者の回答である。

では、これらの回答は、どの程度「正しい」のだろうか。特段に特徴的な目鼻立ちであれば、「目が大きい」「鼻が高い」などと複数の参加者間で一致した反応がなされるであろうが、それ以外の特徴については、正解不正解を定めることは難しい。むしろ、同じ人物に対する記述のばらつきを調べる方が、単に正誤を判断するよりも豊かな情報を提供してくれるように思われる。そこで、調査した参加者数のもっとも多い調査者Fについて、記述のばらつきを調べる

ことにした。Fは62人中27人の子どもに面接を行った。得られた記述内容を表4に示す。

表4：Fに対する記述内容

顔のかたち		髪		目		鼻		口	
こう	3	こう	2	キラキラしていた	1	こう	3	くちびるついてた	1
丸	2	しばってた	2	こう	3	普通	1	こう	3
丸々	1	長い	9	普通	5	三角	1	普通	1
卵みたい, oval	2	短い	2	丸い	2	実験者と同じ	1	細い	1
四角	1	長さ	3	大きい	2	ついてなかった	1	にこって	1
細長い	1	黒	3	赤い眼鏡	1				
		上べちゃんこで	1						

「顔のかたち」については、「丸、丸々」と記述する子どもと「四角、細長い」と記述する者がいる。髪については「長い」が優勢だが、「短い」とする者も2人いる。目、鼻、口は数も少なく、ばらつきは少ない。こういった記述の正誤を強いて決めるならば、顔の「四角、細長い」、髪の「短い」は誤りであろう。しかし、これらの反応をした子どもの写真識別は正しかった。表3に含まれる、写真識別ができなかった子どもの反応は、髪を「しばってた」とする1件のみであった。

#### 考察

本研究の目的は、幼児および1年生の児童が人物をどのように記述するのか、また、その記述と写真識別に関連があるのかを調べることであった。以下、本研究で得られた人物記述の特徴を、植松その他の先行研究と比較し、幼児、子どもの人物記述および顔識別の正確さとの関連について考察する。

まず記述項目数について見てみよう。本研究では、顔はどんなだった？ 目はどんなだった？ のように、項目を掲げてオープンに尋ねる方式をとった。その結果、11項目中幼児が回答できたのは3-4、1年生が回答できたのは6-7であった。幼児による回答が多いのは、体格、髪、服であり、1年生では年齢、背、顔型と続く。幼児では目、鼻、口の記述は少なく、1年生でも鼻、口の記述は少なかった。幼児における結果は、WH質問でもクローズ質問でも正確に答えられていない植松(1958)の結果を追認するものであるといえよう。ただし、植松では「誤答」とされる回答も多かったが、本研究では、得られた反応は概ね「正答」としてもよい範囲のものであった。例えば顔のかたちは「丸」がステレオタイプな反応であり、本研究ではたまたま実験者が丸顔であったために正解となったが、植松では実験者の顔が細長かったために誤答となってしまったという可能性があるかもしれない。また、目、鼻、口については、植松では選択が迫られたために、参加者は回答が分からなくても答えてしまったのかもしれない。こういった可能性についてはさらに検討する必要がある。

次に1年生の反応を見てみよう。1年生では幼児のほぼ2倍の反応が得られた。Memon and Rose (2002)は8-9歳の児童52人を対象に、人物の記述と写真識別を求めている。この実験では、ある人物が教室を訪れ、いなくなってしまった犬について子どもたちに質問をした。この人物

の滞在時間は8分であり、記述および写真識別は24時間後であった。言語記述は本研究と同様、チェックリストに答える形式で行われ、記述項目数は3-4であった。また、Pozzulo and Warren (2003)は10-14歳の子どもと大人の参加者に、実験1ではビデオで、実験2ではライブで人物を提示した。この人物は子どもたちに護身術を教える人物であり、記述および写真識別は直後に求められた。その結果、ビデオで提示された人物の記述項目数は7.6、ライブの場合は3.64であった。これよりも、より少ない数を報告している研究もある (Davies, Tarrant & Flin, 1989; Dent & Stephenson, 1979 等)。これらの値と比較すると、本研究の1年生における6-7項目の記述は、かなり多いといえるだろう。上記の2つの実験は、教室で複数の子どもが一人の人物を (おそらくは数メートル以上離れた場所から) 観察したものであった。これに対し本研究の調査者は、参加者と一対一で、50cm くらいの距離で対応した。こういった目撃時の様態により、子どもの記述数は影響を受けるのであろう。

次に、写真識別の成績、および識別の成績と言語記述との関連について見てみよう。Memon and Rose (2002)は、識別に先駆けて言語記述を行う条件と行わない条件とを比較した。その結果、言語記述条件の正再認率は66%であり、言語記述を行わない条件では82%であったが、有意差はなかった。いずれにしても、正再認をした者の方が言語記述の量は多かった。また Pozzulo and Warren (2003)では、ビデオを用いた実験1の正再認率は65%、ライブの人物を用いた実験2でも65%であった。両実験とも言語記述の量に差はなかった。

常識的に考えれば、人物についてよりよく記述し、説明できる者の方が、よりよく顔を再認できるように思われる。言語記述が再認成績を阻害する効果も知られているが (言語遮蔽効果)、もしもその効果が言語記述により、配置よりも特徴に焦点化した処理が行われるために生じるのであれば (Schooler, 1996)、もともと特徴的な処理を行っていると思われる子ども (Diamond and Carey, 1977) では、言語遮蔽効果はあまり考慮する必要がないのかもしれない (事実、Memon and Rose, 2002 では、言語遮蔽効果は見出されていない)。むしろ言語的な記述は顔の特徴処理を促進し、子どもの記憶スタイルに合致した記憶を強化するのかもしれない。また、言語記述を支える能力が、顔の識別にも関わっている可能性もあるかもしれない。いずれにせよ、人物の報告はまず言語により行われる。この報告の良しあしによって後の識別の可能性を予測することができるならば、それは有効な知見であると思われる。

本研究の結果から、防犯、安全教育に関し、何が言えるだろうか。幼児であっても顔を間近に観察し、30分くらい一緒にいた人であれば、8割くらいの子どもが6枚の写真帳のなかからこの人物を正確に選ぶことができる。言語記述は情報量が少なく、髪型以外に人物を特徴づけるような情報を引き出すことは困難かもしれない。しかし、そうであっても、より多くの情報を提供できた子どもは写真識別も正確である可能性が高い。言語記述の多い目撃者については、後に写真識別が行える可能性が高いと考え、誘導しないように、慎重にそのような機会を待つべきであろう。

小学2年生への強制わいせつが疑われたある事件では、事件直後、児童は「(犯人は) ぼつちりした目、やさしそう、ぼつちりした顔、160cm くらい、・・・眼鏡を掛けたり外したり

する」と豊かな言語供述を行った。この供述をもとに犯人の似顔絵と全身像が作成され、児童は「75%くらい似ている」と述べている。しかしその後、5回にわたり10-20枚の写真が児童に提示された。また、被疑者に対する単独面通しや、被疑者が含まれる写真の提示が行われ、その都度、周囲の大人による「犯人はあなたが一番よく分かっているから一緒に見て。もしその人だったら、もうあんたは何もされないから一緒に行ってみよう」「もしかしたらこの中にいるかもしれないから、写真を頑張って見ようかね」などの教示や説得が行われた。子どもは被疑者（後に被告人）の写真を選択したが、最終的にはこの人物は無罪となった。この被告人は似顔絵と似ておらず、児童が被告人を選ぶ過程で強い暗示があったとされたからである。この事件では冤罪は防ぐことはできたが、真犯人は捉えることができなかった。子どもであっても多くの情報が提供できる場合、後に正確な識別ができる可能性がある。大人はその可能性を失うことのないよう、誘導しない努力をすることが重要である。

#### 文献

- Davies, G., Tarrant, A., & Flin, R. (1989). Close encounters of the witness kind: Children's memory for a simulated health inspection. *British Journal of Psychology*, 80, 415-429.
- Dent, H. R., & Stephenson, G. M. (1979). An experimental study of the effectiveness of different techniques of questioning child witnesses. *British Journal of Social & Clinical Psychology*, 18, 41-51.
- Diamond, R. & Carey, S. (1977). Developmental changes in the representation of faces. *Journal of Experimental Child Psychology*, 23, 1-22.
- Memon, A. & Rose, R. (2002). Identification abilities of children: Does a verbal description hurt face recognition? *Psychology, Crime & Law*, 8, 229-242.
- 仲真紀子 (2005). 目撃証言における顔：顔をどのように伝達するか. *科学*, 75(11), 1298-1302.
- Pozzulo, J. D. & Warren, K. L. (2003). Descriptions and identifications of strangers by youth and adult eyewitnesses. *Journal of Applied Psychology*, 88, 315-323.
- Schooler, J.S., Ryan, R., & Reder, L.M. (1996). The cost and benefits of verbally rehearsing memory for faces. In D.J. Herrmann, M.K. Johnson, C. Hertzog, C. McEvoy & P. Hertel (Eds.), *Basic and Applied Memory Research*, Vol. II. Hillsdale, N.J.: L. Erlbaum, pp.51-65..
- 植松正(1958). 新版 裁判心理学の諸相 有信堂.